

くものいと No. 23

KU MO NO I TO

1997 DECEMBER 31

関西クモ研究会  
大阪府茨木市

## くものいと 23 号目次

田中穂積：IKIP（千島列島の生物多様性の調査）に参加して	1
吉田 真：テレビ三題話	3
関西クモ研究会例会の記録	6
船曳和代：クモの網標本の作り方	7
西川忠樹：クモの観察会（深泥池）	8
（西川さんの許可を頂き、森の新聞（自然観察指導員京都連絡会通信） 第 79 号 31-34 ページより転載させていただきました）	
吉田 真：西川忠樹さんへの手紙	1 2
榊元智子：むっちゃん情報	1 3
ムツトゲイセキグモの採集記録	1 5
近況報告	1 5
データの追加	1 7
会費納入のお願い	1 7
『くものいと』の原稿を募集します	1 8
クモ渉抄録	1 8
やさしい自然教室報告（くもをさがそう）	1 9
（京都科学読み物研究会の許可を頂き、機関誌 185 号 8-11 ページより 転載させていただきました）	
吉田 真：航平君お手柄。キジロオヒキグモをゲット	2 4
（深泥池を守る会の許可を頂き、深泥池ニュース No35, 10 ページより転載 させていただきました）	
トンボとクモ：夏休み子ども観察会に 70 名	2 5
観察会の感想文	2 6
（深泥池を守る会の許可を頂き、深泥池ニュース No34, 4-6 ページより転載 させていただきました）	

I K I P (「千島列島の生物多様性の調査」)に参加して

田中 穂積

“IKIP”とは“International Kuril Islands Project”から名づけられており、内容は“千島列島の生物多様性の調査”を目的としたものである。この調査は3国(アメリカ・ロシア・日本)の研究者で構成されており、植物、哺乳類、魚類、貝類、昆虫・クモ類など多くの分野の生物調査を対象としている。日本隊の隊長は北海道大学水産学部の尼岡邦夫先生で、今回の計画の立案者でもある。

日本隊は3年前から参加し、毎年植物、魚類、貝類、昆虫類、クモ・ザトウムシ類から各1人の計5人から成っている。3年かけて千島列島全体の調査が計画され、今年が最後の年で3年連続で参加している人もいる。1年目が南部、2年目が中部、そして今年3年目が北部ということである。

今年7月20日～8月28日の41日間であった。前日の7月19日に新潟のホテルに全員集合し、ホテル近くの食堂で夕食を取りながら、明日からの予定についての打ち合わせを行う。翌日は朝から全員で調査期間中に必要な食料(醤油、ソースなど)やプレゼントにするセンスやタオルなど買い物に時間を費やす。昼食をすませ、いよいよ新潟空港に向かう。7月20日、16時30分のアエロフロート航空機で新潟空港を飛び立つ。

わずか2時間程でもうロシア、ウラジオストク空港に到着。日本の空港とは雲泥の差、冷房が働いていないのか、汗でびっしょり。荷物が多いため入国手続きに時間がかかる。やっと、手続きが終わり外に出ると、ロシア隊の数人が軍隊のトラックで迎えに来てくれていた。挨拶を交わし、これから41日間の宿、今回の調査船(ボゴロフ号)に向かう。ここが我々の宿泊ホテルという訳である。それぞれ荷物を船室に運び入れ、やっと落ち着いたのは、すでに翌日の午前1時半を過ぎていた。

疲れであつという間に朝という感じであった。7月21日、7時起床、7時30分朝食(パンとバターのみ)。その後、昨日運び入れた荷物の整理に時間を使う。12時昼食(かしわの取り汁など)。2時過ぎからロシア人のLeleji(レレジ)氏と共に市内に行く。ドルをルーブルに換金したり、これからの40日間のためのミネラルウォーターやジュースなどを買い込む。6時には夕食(ジャガイモ、ソーセージ、パンなど)。昼間は暑くて湿度が高く、のども渇く。水がとてもおいしい。今日は疲れで熟睡。7月22日、今日は研究室の整理、それぞれ自分の研究道具(ピンセット、アルコール、顕微鏡など)を出したりする。またアメリカ隊(8名)が到着。久しぶりの再会に話がはずむ。ロシア隊(9名)も随時乗り込む。総勢22名。

7月23日、いよいよ出航準備が始まる。朝5時頃全員集合させられ、一人ずつパスポートの写真とチェック。この辺が社会主義の慣習か。やっと、6時に錨が上がる。いよ

いよ千島に向けて出港だ。我々日本隊が乗船してから 4 日目であった。朝 7 時起床、7 時半に朝食、12 時に昼食、4 時にティータイム、7 時半に夕食と規則正しい毎日の繰り返し。皆、本を読んだり、パソコンを打ったりで時間を過ごす。26 日（出航 4 日目：乗船 7 日目）、クナシリ島に着く。ここから別の州（管轄）になるため、検察官が乗り込み再びチェックを受ける。しかし、なかなか出航しない。やっと 28 日夕方 4 時再び出航。29 日エトロフ島で給水し、8 月 1 日（出航 10 日目：乗船 13 日目）、千島列島の中央の中でも北に位置するウシシル島に昼前に着く。いよいよ午後から調査のための初めての上陸だ。

採集用のリュックサックの用意、アユ釣りの人がはくようなゴムのウェットスーツを着こみ準備完了。はしごで木の小さいボートに乗り移り島の近くまで行く。更にそこからゴムボートに乗り移り島に向かう。栈橋など無いのだ。ゴムボートから島に降りるのがまた至難の技である。北の地方だからか、穏やかな時でも風が強く、結構波が高い。へたをすると海水でべちゃべちゃになる。そのためにゴムのウェットスーツをはいているのだ。それでも濡れてしまう。特にカメラはビニール袋に入れて持ち運ぶ。リュックサックもへたをするとずぶぬれになる。

やっと上陸。今日は快晴で最高だ。島には北海道の高山でしか見れない美しい高山植物が平地でいくらかでも見れるのだ。ただひたすら自分の目的とする生物の採集に必死だ。夕方、再び迎いのボートがやって来、乗り込む。何回かに分けて船にもどるのだ。その後夕食。夜はその日の採集品の整理が待っている。今まで見たことのないのが採れたり、この時間が我々にとって最高の時間なのだ。この間、船はまた次の目的地に向けて走り続けている。翌朝には次の目的地に着いているという訳だ。出来るだけ時間のロスをはぶくために。

この様にしても、採集した日数は全体（41 日）の約 1/3 程しかない。どうしても遠いので、行き帰りに何日も要してしまう。また、いつも波の静かな日ばかりとは限らない。今年も 2 回、台風くずれと、低気圧に出くわした。この様な時にはまさに上下左右にぎしぎし、めりめりと何時壊れるのかと思うほどゆれ、机の上の物はすべて飛び散りきれいなものだ。ひたすら、ベッドの中で寝るのみである。船は島影の風の無い所に避難したりと逃げ回る。

今回計画した島（マカナルシ、パラムシル、シュムシュ、アライトの各島）の調査も終了し、船上での記念撮影。予定通り、ウラジオストクの港に 8 月 27 日（出港 36 日目：乗船 39 日目）の朝無事帰り着く。この日は快晴で、ウラジオスクの町も我々を祝福してくれているようだった。翌 28 日、昼前に船を後にし、町をゆっくり見学も出来ず、空港に向かう。出国手続きをし、一路日本に向けて飛び立つ。新潟空港に無事到着（日本時間 13 時 15 分）。空港のレストランで無事帰国を祝してビールで乾杯！！身にしみるとはこの事か。今回の旅も終了した。日本がいかに恵まれた国か痛感した旅でもあった。現在、採集した標本の整理に追われている毎日である。

## テレビ三題話

吉田 真

### 第一話 早乙女裕子さん

NHKから電話があった。受信料の督促かと思ったが、さにあらず、「オモシロ学問人生」という番組に出てくれという。早寝遅起きがモットーの私は、火曜日の午後11時45分から始まるこの番組を見たことがない。いまいちイメージも湧かないし忙しいから断ろうと思ったが、思い直して引き受けることにした。これを見てクモに対する一般の偏見が少しでも払拭され、クモを研究する若い人たちが少しでも増えればと願って・・

ディレクターの早乙女さんはすごい。店頭にも出ていない私の著書「スパイダーウォーズ」も持っていたし、京都新聞に出た私の記事も読んでいた。ゴケグモ騒動の時に、ろくに下調べもせずに取材に押し掛けるマスコミにほとんど嫌気がさしていた私にとって、これは新鮮な驚きだった。好奇心の塊といった感じで彼女は質問を連発し、大学ノートにメモを書きなぐる。このようにして、彼女の理解のレベルは日ごとに急速に深まり、番組の骨格が作られていった。

この番組も相当なものである。1回目のタイトルは「酒を飲むとなぜラーメンが食べたくなるか?」。「コギャル・ファッションは身体にいいか?」というのもあった。私がみたテープのひとつは「来年の今日の天気は?」というもので、その中身は、実は天気予報へのカオス理論の適用というまじめなものであった。

私のタイトルは「クモの糸は世界最強か?」。10月21日放映である。研究者にとってもっとも興味があるのは自分が今やっている研究である。私は、遊び友達というか、正確には共同研究者である榎元夫妻の全面的な協力の下で、クモの糸と網に関する研究の最前線をこの番組に盛り込もうと考えた。

クモの網の縦糸や枠糸は、カーボン・ファイバーやスチールといった他の繊維より伸縮性に富み、切れにくい。その強さはスチールの5~10倍であるという。網に当たった飛翔昆虫はこれらの糸によってその運動エネルギーを吸収され、抑止されるのだ。

横糸は縦糸よりはるかに弱い、粘着物質の玉(粘球)がついており、クモがやってくるまで獲物を網に付着させておく。横糸(の地糸)にも奇妙な性質がある。引っ張られると1.3倍で切れる縦糸とは対照的に、横糸は2.5倍まで伸びる。

もっとおかしいことがある。たるんだ横糸は、「自動巻取り機」によって短時間でピンと張られるのだ。つまり、横糸がたるむと、余分な横糸が表面張力によって粘球に絡り込まれる。これはどんな条件の下で起こるのか、どのような機能を持っているのか。榎元君と私は興味をそそられ、番組収録の範囲を越えて、日夜実験や観察に没頭した。

早乙女さんが、カメラ、照明、音響など、数人のスタッフを引き連れてやってきた。キャンパス内の林でジョロウグモの網の撮影をした後で、実験室へ。私が「人工網」にネズミホイホイの粘着物質を塗ってるところなどを撮影。榎元君は横糸の粘球への絡り込み過

程を再現しようと必死である。やっと撮影に成功すると、周りから歓声があがる。私は、NHKのスタッフたちとすっかり意気投合してしまった。

## 第二話 酒井ゆきえさん

付き人とメイクさんを引き連れて、酒井ゆきえさんはやってきた。オモシロ学問人生のレポーターである。昔、ピンポンパンの「ゆきえおねえさん」で有名になった彼女は現在、落語番組の司会などあちこちで活躍している。タレントと話をするのも初めての私は、彼女と共演するというので前日からソワソワしていた。

ゆきえさんの第一印象はあまり良くなかった。疲れているのか、どちらかといえば無愛想で、気さくに世間話に興じるようなタイプではない。クモなどを研究している変なおっさんと共演するのがいやだっただけかもしれないが。

午前中は研究室での撮影である。ナゲナワグモのムッチちゃんにも登場してもらい、クモの糸の性質、網の機能、さらにはクモの進化にも話がおよぶ。撮影開始のカウントダウンの際に彼女をチラッと見て、私は愕然とした。肌はツヤツヤと、表情は生き生きと、さっきまでのゆきえさんとはまるで別人である。頭の回転も早い。私が話しやすいように、適切な合いの手を入れて、どんどん話を盛り上げていく。さすがプロである。私はどちらかという、とつとつとした話し方しかできないのだが、この時は実に気持ち良く、喋りまくった。やりすぎて打ち合わせの範囲を越えてしまい、NGもかなり出してしまったが。

「ここは音声を入れないで撮影しますので、適当になんでも喋って下さい」とディレクターが言う。「どうやってこの番組の出演者を探し出すの?」「それはまあ、いろいろと・・・」「オタクっぽい研究者ばかり出演しているようだけど、NHKは『奇人・変人人名録』をひそかに作っているんじゃないの?」「めっそうな!そんなものはありません!」「じゃあ、どうやって僕にたどり着いたか、白状せい!」

午後はキャンパス内のベンチに腰掛けての撮影である。ここは場所が悪い。生協の喫茶店のすぐそばで、学生どもが群がってこちらを見ている。私はビビったが、ゆきえさんは平然としている。

どこにでもミーハーはいるもので、学生達が色紙を持ってサインをねだる。「何や、君ら、ゆきえさんのファンか?」「いや、そうじゃないけど、有名人じゃないですか!」失礼な奴もいる。「化粧の帝王だあ!」「アホ、大きな声を出すな、聞こえるぞ!」スタッフの話によると、ゆきえさんの化粧の長さは有名で、今朝も早起きをして念入りにお化粧をしてきたそう。撮影の合間にはメイクさんが付きっきりで、顔や髪を直している。

この日の撮影で、私はすっかり彼女のファンになってしまった。大変に知的で魅力的な女性である。私も色紙にサインをしてもらい、彼女とツーショットで写真に収まった。



### 第三話 Sさん

Sさんは、NHK大津局のディレクターである。自分の仕事でもないのに、「オモシロ学問人生」のロケにボランティアで何日も付き合ってくれたとんでもない善人である。

「北野ゆうじ」と同じくらい「いい人」であり（ドラマを見なかった人はビックスピリッツを参照）、なかなか困った人でもある。

7月のある日、私のところにふらりと現れて、テレビに出てくれと言う。「ふるさと自然発見」という番組で、滋賀県のクモを紹介したいらしい。ロケは10月だという。その時期にはほとんどのクモが繁殖期を終わっているのだから、撮影は難しいと言って、とりあえず断った。

その後何の音沙汰もないのであきらめたものと思っていたが、そうではなかったらしい。秋にまたやって来て、やはりやりたいという。「オモシロ学問人生」に出て「ふるさと自然発見」は断るといふのもなんだか気の毒で、引き受けてしまった。

ロケの数日前にやっと送ってきた企画書を見て、私は愕然とした。このクモもあのクモも撮りたい、造網・産卵・餌の捕獲、何でも撮るといふ壮大な計画である。「榎元君、どう思う?」「一年はたっぷりかかりますね!」「僕もそう思う」ちょっとやさっとの手直しではどうもならぬ。私は企画書を全面的に書き直し、FAXでSさんに送りつけた!

やっとロケが始まった。Sさんの人徳か、空はからっと晴れ上がり、季節はずれの暑い日が続いた。しかし、ナガコガネグモは死にかけてなかなか餌を捕ってくれず、オオシロカネグモは寒いのか、なかなか網を張らない。撮影できるクモを探す時間ばかりが非常に長い。10分の番組で5日間もロケが入っているのだが、それでもちゃんと収録できるかどうか・

早乙女さんは細かいところまでピシッと打ち合わせをする方だったが、Sさんはアバウトである。「では先生、しゃべって下さい」と突然言われても困ってしまう。「なに、しゃべんねん?」「えー、あれとこれと・・・」しょうがないから、あれこれ思い出しながら、タラタラとしゃべるのだが、どうも気分が乗らない。つい、つっけんどんな話し方になる。「あー、先生、愛がない!」「愛がないって言われてもなあ。Sさんとラブラブして、どないすんねん!」「先生、つれないなあ」だんだんアホらしくなってきた「なあ、Sさん。NHKクビになったら、二人で吉本で売り出そうか」やはり二回目はだめである。「オモシロ学問人生」を収録したときの、あのハイな精神状態を再現できない。

こんな訳で、ロケは何とか終了した。1月3日(土)6:15-6:25am. 放映予定。ただいま編集集中のはずだが、Sさんはまたナシのつぶてである。私は「のんき坊主」のニックネームを奉った。本人は不満らしいが、しかし、これ以上適切な呼び方が他にあるだろうか?

---

そしてその朝。眠い目をこすりながらテレビを付けると、いきなりゾウが出現した!これは違う!アジアの何とかいう番組である。私はしばし呆然とした。あとでSさんに問い合わせると、1月10日に変わったという。せめて出演者には、変更を知らせて欲しい(当人はとっくに知らせたつもりだったようだが)。

## 関西クモ研究会 例会の記録

1997年12月14日(日)に大阪市天王寺区の四天王寺高等学校で例会が開かれた。

### 役員会

例会に先立って、12時から役員会が開かれた。

出席者：山野忠清，吉田真，加村隆英，河井安子，西川喜朗(5名)。

話し合われた主な内容は以下のとおり。

#### 1) 会員数

現在、53名(この報告の後、当日の例会参加者のうち、赤松史憲さんと坂口佳史さんの2名が新たに入会されたので、結局55名となった)。

#### 2) 会計

会計年度は4月から翌年の3月までとすることを確認した。本年度(1997年度)の会計報告は、1998年6月発行予定の「くものいと」第24号に掲載する。

#### 3) 役員の一部交代

現在、会計を担当している河井安子氏の都合により、会計担当者を交代することになった。新しい担当者は未定。正式に決まるまでは、暫定的に山野忠清氏が担当する。

#### 4) 「くものいと」の編集

現在、第23号の編集を始めている。今年(1997年)中に発行する予定。

昨年(1996年)の例会で、本誌をオフセット印刷にするかどうかについて検討するよう提案があったが、結局、もうしばらくの間は現行の形態を継続することになった。

#### 5) 1998年度の活動について

採集会：例年どおり3回行う。1998年6月7日(日)，1998年10月4日(日)，1999年3月21日(日)を予定。場所は大阪府南部あるいは和歌山県北部方面とする。

例会：1998年12月13日(日)に四天王寺高等学校で開く予定。

合宿：詳細は未定。合宿を行う方向で、これから検討する。

### 例会

参加者：赤松史憲，太田定浩，加村隆英，神谷仁視，河井安子，坂口佳史，清水裕行，須賀瑛文，田中穂積，寺田孝重，西川喜朗，船曳和代，山野忠清，吉田真(14名)。

#### 1) 講演

西川喜朗：中国探蛛行

田中穂積：千島列島生物調査に参加して

#### 2) 総会

役員会の報告が行われ、その内容が承認された。あわせて、参加者の近況報告も行われた。その際、船曳さんが網の標本を披瀝され、一同びっくり(クモ網標本の作り方参照)。



# クモの網標本の作り方

船曳和代

## 用意するもの

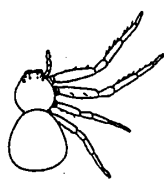
- ベニヤ板（表面のきれいなシナベニヤがよい）
- ラッカー（ブルー，ホワイト，透明）
- 水糊（適当に水で薄めておく）

## 作り方

1. ベニヤ板を適当な大きさに切る。
2. ベニヤ板の表面にブルーのラッカーをむらなく均一に吹きつける。
3. 標本にとりたい網を見つけ、ホワイトラッカーを吹きつける。あまり近くで強く吹きつけると網が壊れるので注意する。
4. ベニヤ板の上に刷毛で水糊を薄く均等にのぼす。
5. 水糊をのぼしたベニヤ板の上に、3. の網をくっつける。板からはみ出した糸は手で切って、ていねいに板の裏側へ巻き取るようにする。（一気に引っ張ると板の途中で糸が切れたりして網が壊れる。）
6. そのまま日光の当たる所に置いてよく乾かす。
7. 十分乾いたのを確認してから、透明ラッカーをまんべんなく吹きつける。あまり少ないと手でこすっても糸がとれるし、一度にたくさん吹きつけすぎるとホワイトラッカーが溶けてくるので注意する。

10年以上前に作成した網標本を今回取り出して見ていたら、いろいろなことが分かった。一口にブルーと言ってもメーカーによって、吹きつけた場合、微妙に異なる色に仕上がっている。網に吹きつけるホワイトも網に付きやすいものとそうでないものがあるようだ。付きにくいと網が細く、くっきりと出にくい。また、ベニヤ板は持ち運びに重い。一度、発砲スチロールのようなもので試したが、ラッカーを吹きつけると溶けてしまい駄目だと思ったが、今回店に行ってプラスチックや発砲スチロールにもOKなラッカーがあるのが分かった。今後もっといろいろな工夫出来そうである。

今回は板をブルーに、網をホワイトで取る方法を書いたが、組み合わせを変えらるともっとおもしろいものが出るかもしれない。



# クモの観察会 (深泥池)

西川 忠樹

日時：1997/8/27 17.00-19.00

講師：吉田 真先生

主催：深泥池を守る会

コース：深泥池南堤から、池の東側を通過して浄水場の水が流れ込む北端まで

実際に観察したクモと吉田先生の説明された内容を以下に簡単に記録します。

この季節、親グモは死亡し、小グモはまだ小さいので観察には余り適さない。  
日本全国で1000種以上のクモがいるが、深泥池には135種が棲息を確認されている。棲息数の多いと云われるトンボ類の2倍である。

ミズクモは日本で8ヶ所しか棲息が確認されていないが、深泥池はその一つである。クモがたくさん住んでいるのは、その土地の自然の豊かさの象徴とも考えられ、中国へ行った経験では、クモ類が少ないのに驚いた。

## ゾグロオニグモ (公園のフェンスに円網)

オニグモ類の円網は中央(コシキ)が糸で閉じられている。(つまっている)  
それに比べて、オオシロカネグモなどのアシナガグモの仲間は、コシキが空白になっている。(一度網を張った後で、食いやぶる)  
だから、網を見れば見分けがつく。

木の葉(枯れ葉)は水には浮くが、空中には浮かない。空中に浮いている葉があれば、そこにクモがいる。

## ハツリグモ

低い草の間に網を張り、二つに折った枯れ葉を吊るしている。葉を開くと卵囊(らんろう)や幼虫が見られる。

## ヒメグモ

不規則な網とその下にシート状の網。枯れ葉を吊るしている。  
子育てをするクモ。網を投げて体重の何倍もの重い獲物をつり上げる。  
(投げ縄という飛び道具を使う。)

## コクサグモ と クサグモ

枝葉の上に棚状の網を張り、その奥の管状住居に潜んでいる。

コクサグモの方が出現時期が遅く、8月末になるとコクサグモが多い。

網には粘りけなし。垂直な網に当たった虫が、水平の棚網に転げ落ちるので  
ノックダウン・トラップと呼ばれる。

## チリイソロウグモ

コクサグモなどの巣に居候している。時には巣の主の餌を盗み、時には他のクモを殺す。泥棒であり、殺クモ屋であり、両方を使い分ける。

その上、厚かましくも他人（他クモ）の巣に自分の卵囊をぶら下げる。

卵囊の先（下側の小グモの出口）に白い突起があるのが特徴。卵囊の中には小グモが50-60匹ほどいる。

## アシナガサラグモ

木の葉間の低い位置に、丸く盛り上がったドーム状の網を張る。皿網という。

## オナガグモ

細長い身体の、変わった形をしている。緑っぽい体色なので、松葉がクモの巣にかかっているようにも見える。

2-3本の糸を引いて、他のクモが通りかかるのを待ちかまえておそう。殺クモ。一般にクモが糸があれば渡るという習性を利用している。

獲物には投げ縄のように糸を投げつけて捕らえる。

## センショウグモの卵囊

## キジロオヒキグモ

これは黄緑色の変わった形のクモで一度見たら忘れられないし、見間違ふこともない。参加していた少年が見つけたが、深泥池ではこの日初めて確認されたという。大変珍しいクモで、吉田先生も瓜生山で2度見ただけだと云われる。

30mm近いメスに比べ、オスは2mm位しかない。メスはお尻からフェロモン物質を出してメスを誘う。

（私は岸本君といっしょに94/6午後、大文字山の大的字の下方の杉林の中でこのクモを一度だけ見かけたことがあり写真にも撮っている。そんな珍しいものとは思わなかった。コガネグモの仲間でも円網を張るそうだが、その時は巣を作る前だったのか、木の幹に一本の糸でぶら下がっていたように思う。）

### ギンメッキゴミグモ

背中が銀メッキしたように白く、腹側は黒い。太陽にどちら側を向けるかで体温調節しているのではないかと吉田先生の推察。

円網の真ん中で頭を上にしてとまっているのも、他のクモにはない変わった性質。(一般にクモは頭を下にしてとまっている。)

近種のギンナガゴミグモは余り見かけない。やはり頭を上にしてとまる。

### コガタコガネグモ

濃い茶色の地に黄色い横筋の優雅なクモ。刺激に敏感で近づくとストーンと地面に落ちて素早く逃げてしまう。

(今日のクモは鈍感なのか、網に触れても逃げない。)

### ユウレイグモ

英名「足長おじさん」 daddy long-legs

### アシダカグモ

### オオシロカネグモ

溪流の上に水平な円網を張り、網の下側に腹を上にしてとまっている。

網の中心部(コシキ)は空白になっており、これは一度張った後食いきるという。(オニグモの円網はコシキがつまっている。)

網は非常に弱く、ガガンボなどの小昆虫を捕らえる。1時間ぐらいで張り終わるので労力はそんなに大きくない。古い網は食べてしまって、タンパク質のリサイクルを行う。その効率95%のリサイクル。

刺激を与えると、緑色の背中の中の黒い筋が太くなる。

近種のチュウガタシロカネグモ、コシロカネグモはやや山間部に住む。

オニグモ(種名を聞き逃しました)が円網を張る様子をしばらく観察。

1時間ぐらいで張り終わるという。

縦糸は粘らない。横糸は粘球糸で粘る。粘球糸は時間がたつと乾燥して粘らなくなる。巣を張る過程では、横糸にも自分が歩く為の粘らない糸を張るが(足場糸)、足場の役割を終えたものから切り捨てていく。

## ジョロウグモ

円網の中に粘らない足場糸が切らずに残されている（オニグモとの違い）こと、円網がまん丸ではなくU字型（馬蹄系型）であること、円網の前と後ろに複雑な迷網を張る3重構造で、迷網に食べかすや脱皮殻をつけていること、糸の色が黄色いことなど特徴が多い。

網が複雑なため張るのに時間と労力を要し、片側ずつ張り直したりする。

（ジョロウグモの網は安易にこわさない方がいいなと反省。）

8-9月の2ヶ月間でメスは餌をどんどん食べ、体重が2.0倍にも成長する。

クモは粘球糸に自分がかくつかないため、粘らない足場糸を使ったり、足の裏や身体から脂肪分を出したりしている。

クモの足の裏には振動覚や味覚がある。獲物がかかるとその振動の種類によって獲物の種類を見分ける。直ちに飛びかかる獲物、用心して足の裏で触ってみる獲物がある。自分より大きな獲物には近づかず、投げ網を使う。チョウやガは鱗粉で逃げられやすいので、直ちに飛びかかり、素早くかみつく。

★「深泥池を守る会」代表の田末利治先生にご無理をお願いして、当会から4人参加させていただきました。

吉田先生、田末先生、それから事務局の西村さん いろいろありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

★この日、丹後半島で捕らえた変わったクモを吉田先生にお見せしたら、これはトリノフンダマシの稀産種かもしれないと云われた。研究にお使い下さいと、生きている個体をお渡しした。

後日、先生からお手紙を頂き、これはトリノフンダマシではなく、ナゲナワグモの仲間、超稀産種のムツトゲイセキグモだと教えていただいた。

京都では3匹目の採集のようで、この日の夜に産卵したそうです。

見つけたのは留岡美美子さんで、午後3時頃、権現山のスギ林の谷筋の道で、目の高さ位の木の葉の上にとまっていたそうです。

先生のお手紙は私信ですが、ご了解を得ましたので掲載させていただきました。

（次頁参照）

西川忠樹 様

前略

先日頂いたクモはトリノフンダマシの仲間ではなく、ナゲナワグモの1種であるムツトゲイセキグモであることが分かりました。あちこちで問い合わせたところ、京都では3匹目の採集のようです。最近はあるところで採集されるようにはなりましたが、なお超稀産種と言ってもいいと思います（森林書房のクモ基本50,98ページ参照）。

27日の夜から28日の朝にかけて産卵しました。まだ固い花のつぼみのように、つぼみのまわりをガクが囲んでいるような、奇妙な卵のうです。東海大学出版会の図鑑の98ページにマメイタイセキグモの卵のうが載っていますが、これとよく似ています。

実験室でススキの上に放してみると、穂先から根元の方に数本の糸を張って網のようなものを作りました。この糸を採集して、強度などを調べています。「投げ縄」は作ってくれず、狩りができなければクモが飢えて死んでしまいますので、餌と思われるチョウやガの体液を吸わせています。現在、京大生態研センターの榊元さんが飼育していますが、9月3日にもう一度産卵したようです。投げ縄を作っているかどうか。子グモが孵化すれば、その行動もみたいのですが、うまくいくかどうか？

こんな訳で、我々は久々に興奮していろいろと調べているところです。どうも有り難うございました。とりあえずご報告まで。

1997. 9. 8

吉田 真

## むっちゃん情報

柘元智子

はじめまして、私は吉田先生からムツトゲイセキグモをお預かりしました柘元智子です。珍しいクモをお預かりしたので、西川さんもお心配ではないかと思い、ムっちゃん（ムツトゲイセキグモにムっちゃんと呼んでいます）情報を送らせていただきます。以下は、1週間ほど前に吉田先生に当てたメールです。参考になるようなものではありませんが、ムっちゃんの生活の一端をご紹介します。

「昨晚、3時頃とうとうムっちゃんが投げ縄をするのを見ました。敏也（夫）がムっちゃんの投げ縄を見ようと、ずっと待っていたのですが（私は寝ていました）なかなかやりません。それで、電気を切って暗くすると（常夜灯の暗さ）、10分ほどで、ムっちゃんが横移動する（糸を張っていたそうです）シルエットが見えたそうです。

しばらくすると（5、6分から10分と記憶が曖昧）、下にツツツと降りてきて、体を揺らしているのが見えたそうです。これは！ と思った敏也が電気をつけると、ムっちゃんが投げ縄をしていたのだそうです（この時点で私も起こされました）。電気をつけても投げ縄はやめずに続けていました。粘球がはっきり見えました。結構大きい粘球でした。

ガが飛ぶと腕を激しく動かし、止まるとちょっと休んだりしていました。しかし、ガが粘球に引き寄せられる風でもなく、ムっちゃんの粘球はむなしく空を切っているようでもありました。あまり効率がいいようには見えませんでした。

そこで、いったん暗くして、10分ぐらいしてまた電気をつけると、なんとガを吊っているではありませんか。羽だけ糸に引っかかっていたのですが、ガはもう逃げられません。ムっちゃんは糸をかけて、ぐるぐる巻きにしていました。敏也はかみついているとってましたが、私は確認できませんでした（ムっちゃんの口は小さいのでよく見えなかったのです）。5分ぐらいで食べはじめました（獲物に頭を付けていたのでたぶん食べていたのだと思います。宙づりで食べていました）。それで、私たちも寝てしまいました。朝、起きるとミイラのようにぐるぐる巻きにされたガが下に落ちていました。暗くすれば、夜でなくても投げ縄が観察されるようです。」

このあと、なかなかガが採れなくてムっちゃんは苦戦しています。あとどれぐらい生きてくれるか分かりませんが、ぜひ投げ縄の写真を撮りたいと思っています（でも、とても難しいです）。では、また変化があればご連絡します。

---

めっきり涼しくなりました。室温は20度を切ることはありませんが、クモにとってはつらい(?)季節になりました。ムっちゃんは9月末ぐらいまでだろうと言われていましたが、10月半ばの16日現在も健在です。ただ、このごろ食欲がなく、ガを口元に持っていても「ちょうだいちょうだい」をしません。ガの種類が気に入らないのかどうかその辺は分かりませんが、ちょっと心配です。寒くなるにつれ、エサのガもいなくな

りガの調達に苦勞しています。2時間ほど探し歩いてやっと2匹採れるか採れないかという有様です。

昨日もガを探しに行ったのですが、なかなか見つかりません。よその家の玄関の石段に1匹とまっているのを見つけてゲット。そういえば、ガが塀などの壁面にへばりついているのを思い出し、塀をジワーツと見ながら歩いていると、突然その家の人と目があって、不審そうな顔をされました。それでもめげずにちょっと低めの塀を、腰をかがめてガがないかと探しながら歩いていると、後ろから来た車の女性が「大丈夫ですか、どうしました」と、車を止めて声を掛けてくれました。

その人は、どうも私が病気か何かで、ふらふらと壁にもたれながら歩いているのではないかと思われたようです。「違うんです。ガを探しているんです」と言おうかと思いましたが、ますます変な人と思われそうなので「具合が悪いのではないんです。ちょっと捜し物をしているんです。ご親切にどうも」とごまかしました。でも、よく考えてみると、そんな何もない塀のところで捜し物をしているというのも、しっかり怪しいですよ。クモのエサ探しは本当に苦勞が多いです。

それにしてもムッチャンはどうしてガを食べないのでしょうか。10日前には手渡しで2匹食べたのですが、今はいらないと言います。元気がないから食べないのか、エサの種類が気に入らないのか、そこのところは分かりません。

ただ、このところ採れるのは、小さなコナガや大きすぎるガ（種類は分からない）で、ムッチャンの好きなサイズのガ（私には名前が分からない）はもう見つかりません。もしガの種類やサイズが決まっているなら、これは困ったことです。

人なつかかったのに「おいで」と言って指を出してもケージにへばりついて動きません。無理に移動させようとする、いやがります。もう少し生き続けてくれたら、また秋のエダシャクなどが羽化するので、エサも手に入るようになるのではないかと思います（エダシャクを食べたらの話ですが）。それまで、何とか生きていてほしいものです。ちなみに敏也は毎日「ムッチャンが死んだら、すぐにアルコールに入れるんだよ」といって出かけます。ムッチャン長生きしろ！

1998年1月11日

とうとう、年を越してしまいました。ムッチャンはまだ健在です。毎朝、敏也がムッチャンの安否を確認します。私は、「あー！死んでる」というのが怖くて、見る事ができません。横から「生きてる？」と聞き、「大丈夫、生きてる」というのを聞いて、安心します。この前、エサのガを食べたのは12月30日です。目の前に持っていくと、ちゃんと受け取って食べます。エサを食べた翌日は、糸を出してぶら下がっていて、まだ、ガがいそうだから喰ってやるゾ、という感じです。まだまだ食べる気十分で、ガさえ食べられればまだまだ生きるのではないかと思います。でも、ガがないんですよ。飢え死にだけはかわいそうです。ガを見つけられたらぜひ採集してください。そしてムッチャンのご飯に提供してください。お願いします。



## ムツトゲイセキグモの採集記録

加村隆英さんによれば、むっちゃんは京都府で採集された 3 匹目のムツトゲイセキグモです。前 2 回の記録は、1) 京都府加佐郡倉梯村字行永、井関尊二、1メス(中山直記、1930. イセキグモの分布に就いて. *Lansania*, 2(19):129-130.), 2) 京都府宮津市栗田半島、1983年6月8日、笹川・池尻・加村・上田 leg. 1幼体(スノーピングによる)。むっちゃんを含め、いずれも丹後半島での採集です。

ところで、近畿の他の府県の採集記録はどうなっているのでしょうか？誰かご存じありませんか？

## 近況報告

12月14日の関西クモ研究会例会に出席された方々の近況報告は以下の通りです。

### 寺田孝重

久しぶりに来ました。発足の会合以来かと思えます。仕事が事務になり、技術や研究とはまったく縁がなくなり、悶々としています。それでも、果樹と茶を担当して、その日を送っています。クモとは関係がなくなって久しいですが、セアカゴケグモ騒動のときは少しタッチしました。平成7年に学位を取りましたが、役には立っていません。それでも現在は「茶花」の研究をして、『茶花の散歩道』(淡交社)を出版しました。

### 清水裕行

今年は多事多難で、クモの研究はあまりできませんでした。私的なことから申せば、6月に25年間住みなれた西宮市苦楽園から芦屋市親王塚町に転居しました。苦楽園は自然に恵まれ、家の周りで日本新発見のヒゲナガツヤグモが取れたくらいです。しかし、標高200mの山麓は母には苦しいので、駅に近いマンションを選んだのですが、その母が5月に急死したため、現在は一人暮らしです。三重での蜘蛛学会大会には久しぶりに参加して、兵庫県のクモ研究の現状をパソコンによる分布図を使って発表しました。その時に仲良くなった韓国の学生のうち3名が大会後に大阪に立ち寄ったので、北新地の寿司屋に案内したところ大変喜んでくれました。後に俞景善(yoo Jun-Sun)氏がL. Kochの"Japanesishe Arachiniden und Myriapoden"のコピーを送ってくれました。

### 河井安子

時間の割り振りが下手で、なかなかクモの観察もできていない。早朝の犬の散歩でゴミグモと出会い、一週間ほど餌の取り方を観察していたら、二週間目には網が壊され、

ゴミグモが見当たらなかった。早朝の6時30分頃、犬を連れて何かしていると近所の方が気味悪がり、壊したのでしょう。クサグモも観察したが、4日目に巣が壊されたので、クモたちが可哀相になり、観察をやめた。

その後6月に会話クラスの生徒が、今年の夏は自由研究でクモをやりたいとやってきた。そこで夏休みに、和歌山県野上町の家や清水町でクモを採集した。生徒の家が加村先生の家に近いので、同定は加村先生に追手門大学の研究室でしていただいた。いろいろ教えていただき、タランチュラも見せてもらったと喜んでいて。クモの先生ということで怖い人と思っていたが、とてもやさしかったとベタ褒めであった（河井先生よりやさしかったとのこと）。

このことで、自分自身がクモの研究をできなくても、将来の蜘蛛学会の会員を増やす手助けが少しはできるかなと思った。

#### 田中穂積

今年は、7月末から8月末まで約40日間、千島列島の採集に行くことができました。標本には、日本には分布していないものもあり、種名が難しいものもあります。まだだいぶ時間がかかりそうです。

#### 坂口佳史

最近、田中穂積先生と20余年ぶりに偶然再会したのがきっかけで入会しました。25年前にクモの採集をしたことがあります。勤め先は大阪府狭山保健所でセアカゴケグモの「見張り番？」をしています。例会には、知り合いの神谷氏が同行しました。彼は、クモ学会なるものがどんなんか知りたかったようです。

#### 太田定浩

日本蜘蛛学会第29回大会・総会を三重県四日市市で開催し、会長はじめ会員の皆様のご協力が無事終了でき、ほっとしています。四日市市のセアカゴケグモは世間からは忘れられようとしています。分布範囲を広げてはいないものの依然生息しています。富双地区での野外調査は1998年4月で丸2年になるので、それまで調査を継続した上でまとめをしたいと思っています。

#### 西川喜朗

太田さん、須賀さん、遠いところからのご参加有り難うございました。船曳さんのクモの網の標本（ベニヤ板版）を見せていただき、大変感激しました。私はこの秋に1か月半ほど中国南部の洞窟性および土壌動物の調査に行ってきました。今年はいろいろあって、クモの研究はあまり進みませんでした。来年は頑張ります。

船曳和代

今年4月最愛の息子を失った。それ以来週末には近くの山裾を流れる小川の辺りを散歩し、花を見たり虫に出会ったりしながら過ごした。悲しみは多分、何度も何度も思い出したり涙を流したりしながら癒されていくものと思ってじっとその時を待っている。

変身の時まつ蝋繰り返し、思い出しては涙流して

これが私の今の心境である。

#### データの追加

1) 1997年6月8日に行われた関西クモ研究会の採集会(草津川上流)で、船曳和代さんがフタオイソウロウグモとチリイソウロウグモを採集されています。

2) また、くものいと No. 22 に掲載された種名目録に、コオニグモモドキ (6月:♂) を追加します。同定していただいた谷川明男氏に御礼申し上げます。

## 『くものいと』の原稿を募集します。

関西クモ研究会では年2回、会誌を発行しています。地方同好会誌の利点の一つは、いろんなことが気軽に書けることです。どんな些細なことでも結構です。案外それが、大発見につながるかもしれません。どんどん原稿をお寄せ下さい。

- ★ 論文、記録、感想、紀行文、質問など、何でも結構です。多少クモから外れても、まあ、いいとしましょう。
- ★ 原稿が手書きの場合は、編集で打ち直します。
- ★ 原稿をワープロで打つ場合は、B5 サイズで印刷して下さい。編集作業の簡略化のために、MS-DOS の TEXT に落としたフロッピーを同封していただくか、e-mail で送っていただくと助かります。
- ★ 次回の『くものいと 24号』は1998年6月発行予定ですので、5月31日を〆切とさせていただきます。原稿の宛先は下記にお願いします。

吉田 真 〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1

立命館大学理工学部生物地球科学研究室

TEL 077-561-2660 FAX 077-561-2661 e-mail: myoshida@bkc.ritsumei.ac.jp

### クモ渉抄録

「クモ学」の先輩である福本伸男さんが今までの研究を「クモ渉抄録」という冊子にまとめられました。Atypus に掲載された「鳥取県砂丘のイソドクグモの分布」「伝説：やろく淵」「クモの歩行動作の分析(1)」「同(2)」など12編、「鳥取県産クモ類目録」など他の雑誌に掲載された数編、その他にこのたび初めて執筆された「大上宇市とクモ研究」と「クモの俳句」があります。先日の関西クモ研究会の例会に出席した各氏がこの冊子をいただきました。どうも有り難うございました。

11月「やさしい自然教室」報告 記録(岡本)

テーマ	くもをさがそう	場所	二軒茶屋周辺
講師	金野晋, 畑守有紀, 吉田真		
日時	9年11月9日 10:00 ~ 12:00		天候(晴れ)
参加人数	大人18人・子供22人・計40人	担当	上野・島崎

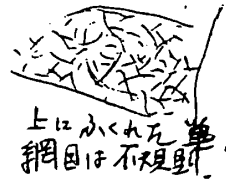
内容(集合場所、道順、観察・採集したもの、その数など...)感想

カネノ氏, ハタケ氏にも指導いただいたこと。

ユノハマ  
サラグモの巣

10:13出発(二軒茶屋駅前)

- ゴミグモの子糸
- コクサグモ(?) (クサグモは今の時期は死んでいる)  
シート状の巣: おくはトニエニ状の部分。おどろがすと落ちてた。
- ジグモの巣... 地面から伸びた筒状の巣。つくと中心が丸く。
- ジョロウグモの巣 → 飼育しやすい。
- キシノウエトタテグモ... 石垣の間などにもいる。
- アズマキダグモ
- ハシダグモの子糸も(大きくてと体長25mm) ほどにた。
- ヨツデゴミグモ(おしり4つとかがら部分) → 中心付近は 糸のようが つかた巣
- ハシダグモの 全ねんごの子糸も多数 (?)
- オナカグモ(スピイダキター)の子糸も
- ヒメグモの巣 その上にはイソウのグモの卵(つるいてる)
- マネキグモ(3匹も) (本の糸ははいてる。ゆきとまのね巻をかける ようすが名前の由来)
- クエウガタコパネグモ 草地~山地
- ヒラタグモの巣 (ハレまくと2重に張りめぐらした)
- ヤシロオオグモ ← まいって巣の 周りに自分の 居場所を 作るらしい。



○キノボリトタテグモ(神経管) 黒くて腹部以外は灰色



○ゴミグモ これはおしりの糸が6つほどある



○キンメツキゴミグモ 腹部の上面が銀色。 下面は黒、ほら、日光にどちらを向けるかで 体温調節をしているのと同じかい? とのこと。

○ウロコアザグモ(緑色)

○ハナグモ

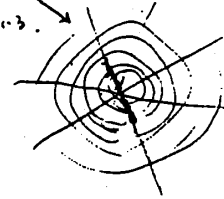
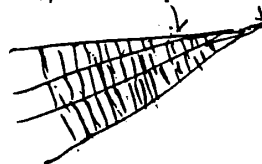
○シヤグモ(スキの皮の下穴)

○ウスグモの巣(ディスク状のもの。こうのもある) (腹の穴が通っているというものも) (11, 12, 13と直線状)

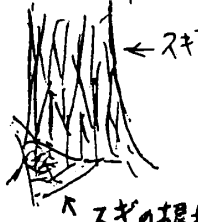
○オウキグモ

右の糸は父本

72は2匹いる



○アサヨグモの巣



↑ スギの根とシート状の巣をばらした

11:43 美名越乃社前にて 子糸の。

二軒茶屋の観察会で確認されたクモ (1997年11月9日)

by 吉田真氏

トタテグモ科：キシノウエトタテグモ，キノボリトタテグモ

ウズグモ科：ウズグモ，オウギグモ，マネキグモ

エンマグモ科：ミヤグモ (住居)

ヒメグモ科：ヒメグモ (網のみ)，オオヒメグモ，オナガグモ，チリイソウロウグモ (卵のうのみ)

サラグモ科：ユノハマサラグモ，アシヨレグモ

コガネグモ科：アオオニグモ，コガネグモの一種 (おそらく，コガネグモかチュウガタコガネグモ)，ギンメッキゴミグモ，ゴミグモ，ヨツデゴミグモ，ジョロウグモ，ヤミイロオニグモ

アシナガグモ科：オオシロカネグモ，ウロコアシナガグモ

ヒラタグモ科：ヒラタグモ

タナグモ科：クサグモ (古巣)，コクサグモ，ナミハグモの一種 (巣)

キシダグモ科：スジアカハシリグモ (?), アズマキシダグモ

コモリグモ科：ウツキコモリグモ，カイソクコモリグモの一種

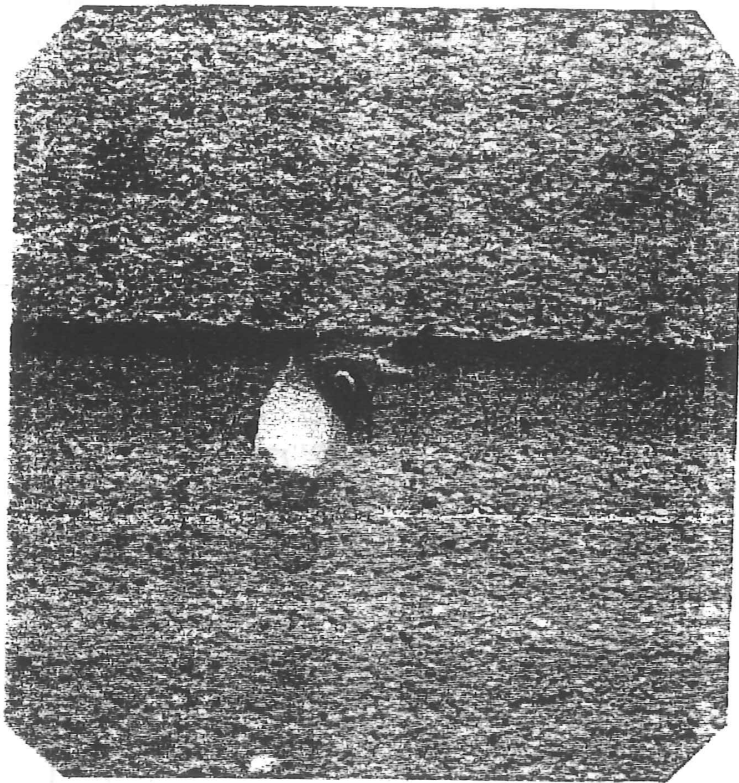
カニグモ科：ハナグモ，オオヤミイロカニグモ



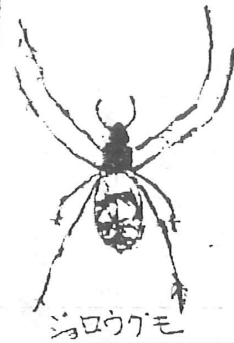
キシノウエトタテグモ

X3倍 岡本みどり氏撮

# 自然教室参加者からのお便りコーナー



巣の中のヒラタクマモ (外側の膜をはがしてみたところ)



シロウグモ

クモ

11月9日 午前10時

二軒茶屋馬場からクモをさが

し踏きました。シロウグモ。

はとでもきれいでクモの網も

とても細く美しかったです。

その他、コブクモ、シジメ、ゴミクモ、ヒメクモ、イソウグモ

コブクモ、シジメ、ゴミクモ、ヒメクモ、イソウグモ、ウズクモ、中かたコブ

クモなどほかまだいろいろ見つけました。私は最初クモ

をさがしては、でももうさわれるようにはなれなかつたので、

感じます。行ってよかったです。家に帰って、虫かごに入れて、スチ

ートでいいところにつかまえたクモを入れました。2日後、

のそいて見ると10センチほど入れたのにシロウグモだけはい

ませんでした。全部食べられていました。大きなクモの網もは

いきました。 (小玉) 越島 茜香



あうちにかえて、モシカニにいたたら  
本々いくも、ころい、にらいいい、まは  
たてられた、大子いくも、ピキ

にらった、えさ、せ、ん、ん、あ、け、て、い

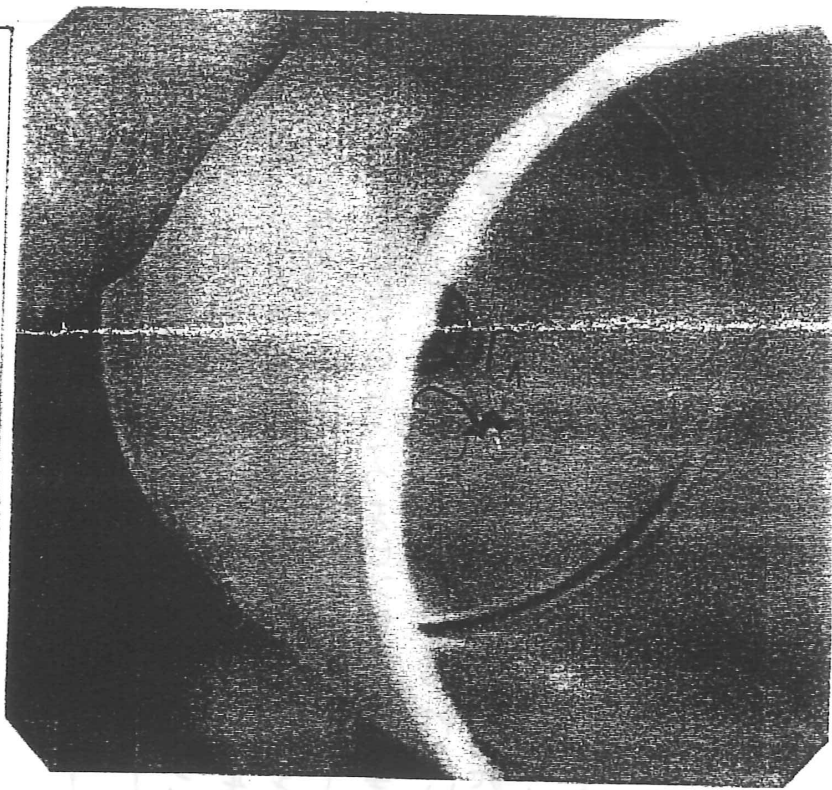
そ、え、で、が、り、に、な、つ、た、た、か、ら

ま、る、む、し、を、あ、げ、た。

や、わ、た、し、ほ、し、も、と、い、さ、い

11-7

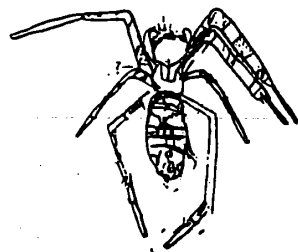
越島 茜香 (小玉)



ウロコアシナカクモ X3倍

(フィルムケースの中に糸を張って  
そのうえに止まっている)

クモの名前がいっぱいおぼえて  
おもしろかった。



ジョロウグモ



ハナグモ

川村佳祐

天体について、とても興味をもっている二人の息子。  
好きではあっても、理論がなかなか理解できない。私も  
それを人の目的でもって参加させて頂き、楽しい時  
間を過ごすことができました。 母、玲子

星はそんなよにたくさん 木田生のよこに、木田生  
みられたよかったけれど、ネ、せいしんか、土曜のあか見  
学校では教えてもら  
えないう星が見られて  
よかったです。

小6 光本行志

小2 光本 仰志



ひらたぐも

島崎 千里

クモの観察会の終わりにジャンケンで、キシノウ  
エトタテクモを勝ちとりました。その日に先生  
に教えていただいたようにスズムシマットを入れ  
てつなため、そこにクモを入れてやりました。  
二日後、ふたらしいところをピンセットでつまん  
で開けてみると、中は白い糸でおおわれていま  
した。巣の近くにアリエ一匹とタンゴムシ二匹入  
れてやりましたが、まだえさをとるところは  
見たことがありません。今はどういいうわけ  
か、古い巣をすて、新居建設中。とキコとキ  
ふたをあけてのぞいています。

大道悟





# 航平君のお手柄

夜のクモは大当たり！

夏休み子供観察会報告

## キジロオヒキグモをゲット！

夏休みの8月27日（水）に行われた子ども向け観察会で、講師をお願いした

守る会の幹事会にはじめて顔を出したら、観察会の講師をやることになってしまった。日頃さぼっているから、断るわけにもいかない。夏は暑いので、夕方5時の集合とした。こんな時間にクモの観察などに出てくる人がいるのだろうか心配したが、意外にもたくさんの方が集まってきた。

霧吹きで水をかけると空間に網がはっきり浮かび上がり、歓声が上がる。ジョロウグモの馬蹄型円網、お椀を伏せたようなアシナガサラグモの網などなど。クモ殺しのオナガグモやこそ泥のチリソウロウグモもたくさんいる。変なクモがいるというので駆けつけると、これがなんとキジロオヒキグモ。石黒航平君のお手柄である（私はまだ京都で3匹しか見ていないのに、子供の目はすごい！）。

吉田真先生（立命館大・本会幹事）に、寄稿していただきましたので紹介します。

夜の観察もいいものである。涼しいし、手元だけしか見えないので集中力が増す。池の南東には小さな流れがあり、オオシロカネグモやヤマシロオニグモが造網中であつた。粘着物質が付いている横糸は光って見えるが、縦糸はあまり光らない。思ったよりも多くのクモが見つかり、参加者もそれなりに楽しめた様子。

別れ際に西川忠樹さんから、8月24日に峰山町でとれた奇妙なクモを預かった。「トリノフンダマシ類だと思うのですが、図鑑に出ていないので・・・」。調べてみると超稀産種のムツトゲイセキグモ。このクモはその後ムッチちゃんと名付けられて大津市在住の榊元夫妻に飼育され、10月21日のNHKの番組に出演した。

（よしだ まこと）

岸边に打ち上げられたヒシの説明をする村田先生と、熱心に聞き入る観察会参加者  
(97.11.9, 秋季観察会, 撮影, 伴)



# トンボとクモ

## 夏休み子ども観察会に70名

恒例の夏休み子ども向け観察会が、8月4日(月)、27日(水)の両日開催されました。

1回目は、トンボをテーマに、「トンボと自然を考える会」の小田耕一郎さんを、講師にお招きしました。約40名のみなさんが参加しました。

深泥池では、これまでに62種のトンボ類が確認されています。近年、まったく姿を見せなくなったものも、少なくありませんが、今回は12種ものトンボが確認されました。特に、イトトンボ類がめだちました。

2回目は、巣を張るクモの生活時間に合わせて、夕方5時からの観察会でした。約30名もの参加があり、講師の吉田真さん(立命館大理工学部、本会会員)もビックリされるほどのにぎわいでした。

深泥池のクモというと、「ミズグモ」が有名ですが、これは浮島のミズゴケの中に潜んでいるので、そう簡単には観察

できません。しかし、このあたりではたいへんめずらしい南方系の「キジロオヒキグモ」(写真)をはじめとして、19種類のクモが観察できました。

今年は、初めての参加者がめだちました。深泥池の貴重さを、さらに多くの市民、特に若い世代へ、訴え続けていく必要があります。

次ページで、クモの会の参加者3名の方から、寄せられた感想文を紹介します。

### 学研に観察会の案内

今後、学研(学習研究社)の子ども向けの科学雑誌に、深泥池観察会の案内が、掲載されることになりました。宣伝を強化すれば、観察会の参加者も、会員ももっと増え、深泥池への関心もさらに高まり、池の保護にもプラスになるはずです。

(p6参照)

# 観察会の感想文

クモ 石黒 文野

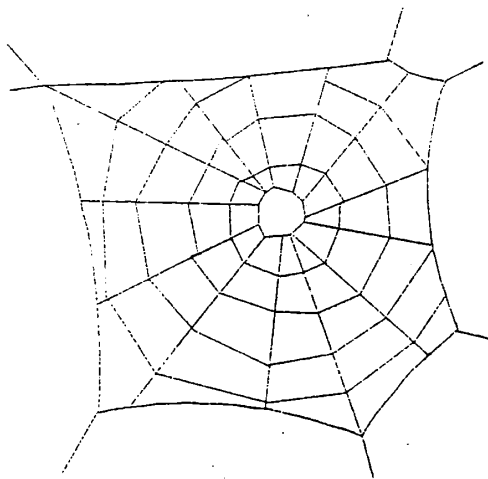
おふる場にいるクモ  
ちょっぴりこわいけど  
蚊を食べてくれるから  
おいださない

雨あがりの夕がた  
庭の通り道  
CDがうかんでた  
と思ったら  
クモの「す」だった

夜のバスでい  
上を見たら  
あっちもこっちも  
クモの「す」だらけ

八本足で  
ゴジョゴジョゴジョ

(原文は縦書き)



## クモの観察会に参加して

家の中にも くさむらにも 石垣にもクモがたくさんいる事は知っていましたが深泥池のまわりだけでもびっくりするほど多くの種類のクモが 多様な生き方をしているのを 目の前で教えてもらって 思わず興奮してしまいました。

クモが 自然のバロメーターとなることや 様々な生態系のなかで 重要なバランスをとる役割を担っていることも知りました。

中心部をしっかりとつくるクモ 中心部は

## 『クモの事・・・観察会で』

ぼくは、クモの観察会で、[キジロオヒキグモ]と言うクモを見つけました、そのクモは、薄い黄緑色の桜の花びらみたいな形の、3cm位のクモで、変わったクモだとは思ったけど、そんなに珍しいとは思いませんでした、深泥池では今までに見つかっていない種類だと言われた時は、凄くクモを見つけたぞ!ってきもちでした、だけど、もし僕らがその時に見つけなかったら、ほかの時に見つけてたら・・・、[キジロオヒキグモ]は見つからずじまいだったんだから、見つけられて本当によかったと思います、

石黒 航平

キジロオヒキグモ



空間にしてしまうクモ 垂直に巣を張るのもいれば水平に張るのもいる 他人(クモ)のエサのよこどり専門のクモもいるそうです。又ヘッドライトのような目が8こもあるのに ハエトリグモ以外は あまりよく目が見えてないそうです。

自分で張った網を食べ ふたたび網にしてはき出すリサイクル率95%にも及ぶクモがいる という話も印象的でした。

どんな小さな虫も そしてクモも すこし立止まってみつめてみれば えーっ! どうして! なぜ! こんなものが! というおどろきの連続です。

3年生の娘の練習しているピアノ曲が

「タランテラ」という曲で、「タランテラ」というのはクモのことかな？と思っていたところ、P. ヒルヤードの「クモ・ウォッチング」という本を読んでいると驚くような事が書かれていました。

中世のイタリアで毒グモのタランチュラに噛まれて狂って踊る病気が伝染して、大勢の人々が踊り狂ったそうですが、そのダンスをタランテラと言うのだそうです。

もともとそういう舞踏のリズムがあったのかどうか、その辺はわからないのですが、とにかくすごく流行ったのだそうです。中世の鬱積した時代状況の中、そんな爆発的な事があったようです。日本の「おかげまいり」のようなものかなーと思います。

子供達と図鑑を見ながら、日本にいるクモは毒性がうんと低くてよかったね。といいあったりしました。

また、夫は子供の頃、あき缶にジグモを集めて友達とけんかさせて遊んだり、ジョロウグモの巣を手製の金魚すくいのような針金の輪にいっぱいくっつけて、蝶などをつかまえて遊んだそうです。ま

たカバキコマチグモの巣を「まんまたけまんまたけ」と唱えながら開いて、中に小さな米粒のようなものがあれば「まんまたいたー」とはやして遊んだそうです。もちろんカバキコマチグモという名も、そのクモが日本のクモの中では一番毒性が強いという事も知らずに

そんなわけでわが家では、しばらくクモの話題が続きました。

ほんの少しクモの不思議の世界をかいま見ただけでしたが、断然クモに親しみをを感じるようになりました。ありがとうございました。

M. I

(編集長の蛇足：じつは大学時代、フォークダンスクラブに所属し、「タランテラ」も踊ったことがあります。非常に激しい踊りで、確かに毒グモの痛みを紛らわす効果はありそうです。しかし、M. Iさんのおっしゃるとおり、毒グモに刺されたからではなく、当時の社会背景が生んだ、群集心理によるものだったようです。)

〈関西クモ研究会〉

会長 山野忠清

編集 吉田 真

庶務 加村隆英

顧問 西川喜朗

くものいと 23号

発行年月日 1997年12月31日  
発行者 関西クモ研究会 (代表 山野忠清)  
住 所 〒567 大阪府茨木市西安威2-1-15  
追手門学院大学 生物学研究室内 TEL 0726-43-5421  
(内線 5113 西川研, 内線 5106 加村研)